

## フォーラム委員会活動報告

# 第192回 aaca フォーラム開催報告 現在のアートをめぐるいくつかの問い ～アートキュレーションの視点から～



講師：東京都現代美術館学芸員 藪前知子氏

第192回 aaca フォーラムは、2018年3月27日 AGC スタジオにて、現在のアートをめぐるいくつかの問いについて、アートキュレーションの立場から、東京都現代美術館(MOT)の学芸員である、藪前知子氏にお話し頂いた。

昨今キュレーションという言葉が注目されており、アートのみならず、ファッションやフードなどの世界でも多用されるようになった。新しく何かを作り出す行為だけではなく、今ある無数の情報の中から、ある世界観に基づいて情報を拾い上げ共有する行為に対して、クリエイティビティを見いだすことに共感が集まっているとのこと。

では、狭義のキュレーターである学芸員とはどんな役割なのか。一言でいうとアートプロジェクトを企画する人の総称である。

展覧会のコンセプト立て・作品選定・論文執筆が本来の業務であるが、明確に分業化されている欧米とは異なり、日本の学芸員は上記に加え、資金調達やプレス対応、場所の確保や交渉、アーティストの滞在手配まで、業務内容は多岐にわたるようで、幅広いマネジメント能力を必要とされる業務である。

そして、講師の専門分野である現代美術は、「今」の表出であり、特に東日本大震災という衝撃を経て、世界的な潮流でもあった、社会に介入するアートが日本でも本格化していく一方、制作され美術館に収蔵された段階で、作品は過去になる矛盾をはらむ。その矛盾に常に対面している講師が語った「キュレーションとは『今』と『作品』を媒介することであり、今生きている人間の代表としての視点を持って『なぜ、今、この作品を、この場所で、見せなければならないのか』というアクチュアリティ(=時宜性)をいかに作ることができるかが重要であり、それは現代美術のみならず、全ての時代の美術を扱う場合にも必要な視点である」との言葉には含蓄があった。

事例紹介の前半は、その社会的な流れの中で講師がMOTで企画した常設展「私たちの90年 1923-2013」(2014年)

及び、夏休み時期の企画展「おとなも子どもも考える ここはだれの場所?」(2015年)をベースに、作家という個人的な感覚から発想されて生み出される作品を、一つの視点から統合し、展示・公開する中で、「公共性とは何か」というラインをキュレーションで担保する様を見せて頂いた。

一方後半は、美術館から飛び出して町に展開するアートについて。

東京都現代美術館は、2016年6月から今年度末まで、大規模修繕のため休館しているが、清澄白河の町の中にアート活動を展開させるMOTサテライトが2017年春と秋の二回開催された。清澄白河は、歴史ある下町としての強いコミュニティが存在しつつ、ブルーボトルコーヒーをはじめとしたサードウェーブコーヒーがいくつも進出しており、新旧の対比が熱い地域である一方、ジェントリフィケーションも進行しており、先鋭的な文化が残るかどうかの瀬戸際な地域である。題材となった「MOTサテライト2017春往来往来」では、地域に住む様々な分野の作家を「地域パートナー」として盛り立てる形で、町の魅力を多方向な切り口で掘り起こす様子が生き生きと紹介された。ホワイトキューブの中でキュレーターが主体的に方向付ける展覧会と異なり、地域とアートを結びつける触媒となり、やがてコミュニティが自立して歩み始められるよう手助けする試みであり、キュレーションという活動の幅の広さが興味深い。

その他にも、札幌トリエンナーレなど興味深い事例を多くご紹介頂いたが、誌面の関係で割愛させていただく。

今回アート事例を豊富にご紹介頂いたが、「アートのアクチュアリティ」と「公共性」について一貫して深く考察されていることが印象的であった。公共空間と言葉にすると未来永劫変わらない概念かのような錯覚をしてしまうが、時代によって「公共」はどんどん変化していく。その変化を切り取る視点を露わにすることが、現代美術のキュレーションであることを改めて見直すよい機会となった。

(フォーラム委員会委員 津野恵美子)

